

氏名	たさき あきこ 田崎 亜希子
学位の種類	博士（国際コミュニケーション）
報告番号	甲第4号
学位授与年月日	令和3年9月17日
学位授与の要件	学位規則第4条、武蔵野学院大学大学院学則第20条第2項及び学位記授与に関する規程第3条第3項の規定による
学位論文名	マレーシアの国民形成における華人の統合に関する研究—その様態の考察とコミュニケーション政策の役割の検討を中心に—
論文審査委員	主査 武蔵野学院大学 教授 謝 心範 副査 武蔵野学院大学 教授 佐々木 隆 副査 武蔵野学院大学 教授 久保田 哲

論文の内容の要旨

本論文はマレーシアの国民形成における様態とコミュニケーション政策の役割について検討し、マレーシアの統合について、また華人にとっての統合を研究し、まとめたものである。構成は序章、第1章から第8章、終章、引用文献・資料で構成されている。

序章では多民族、多言語、多宗教と言われる様々なエスニック・グループから構成されるマレーシアの国民形成に華人の統合に関する研究を行う経緯並びにこれまで田崎氏が発表してきた論文等と章構成などの関係を明らかにし、その他本論中での用語の使い方について予め説明がなされている。

「第1章 統合をめぐる理論の検討とマレーシアにおけるその事例的考察」でカール・ドイチュに代表される古典的な統合論に沿ってマレーシアの国家統合・国民統合を論じた。国へ向けての発展、言語の統合過程、エリートの統合、国民へ向けての統合の過程、国民が創出される過程、政治統合による国家が形成される過程である。マレーシアの現実的な統合については多極共存型民主主義体制の時期もあったものの、文化的多元主義を踏まえての統合である。ナショナル・アイデンティ、ナショナリズムの高揚を目指してマレー語の公用語化に踏み切ったが、政治的なマジョリティはマイノリティに対する意識や構造改革の具現化が求められることを論じた。

「第2章 国民統合におけるコミュニケーションの役割と政策：マレーシアにみるテレビ放送と言語の問題を中心として」では、テレビ放送政策と言語政策が多民族、多言語と

いうマレーシアの国民統合という目的のために実施されたことについて考察した。特にテレビ放送におけるマレー語、華語、タミル語、英語等の言語の位置付けが共存ではなく、平行的であることが、国民統合がうまくかみ合っていない要因のひとつではないかと論じた。

「第3章 マレーシアにおける華人の移住と定住の歴史過程」ではマレーシア華人が、大陸から移民してきた歴史過程を中心にどのように定着し、存在力を高めてきたかを論じた。15世紀に建国したマラッカ王国時代、明の時代より中華系住民が増え、コミュニティを形成してきた長い歴史があり、1980年代半ばより中国の改革開放政策によりマレーシアと中国の関係は活発化していく。しかし、ブミプトラ政策が続く限り、マレーシアの華人は言語の問題を含め、自分たちのルーツへの強い意識があるだけに、華人のマレーシア社会への貢献を考えると、政策の転換も必要ではないかと論じた。

「第4章 マレーシアを構成するエスニック・グループの社会文化的背景」では、国家統合の観点からマレーシアを構成するマレー人、華人、インド人の文化的背景を論じた。マレー人は54.6%、華人は24.6%、インド人は7.3%を占めている。華人は強固な華人ネットワークを構築し、血縁・地縁・業縁という三縁により、生活基盤を強めている大きな特徴を持っている。この三縁は華人団体を強固にするだけでなく、政治参加、教育でも持続性なるネットワークを構築しており、このネットワークはマレーシア国内にとどまらず、国際的な広がりを見せている。マレーシアでは言語や宗教の違いがエスニック・グループ間の大きな差異があることを受け入れ、衝突を避けることで社会の発展に導いたことを論じた。

「第5章 マレーシアのエスニック・グループとナショナリズムに関する考察」ではマレーシア独立当時のマレー人のナショナリズム、華人のナショナリズムについてまとめ、エスニック・グループの動向についてもまとめた。多民族、多言語、多宗教で構成されるマレーシアでは、1969年5月の総選挙で与党が大敗したことにより勃発した5・13事件はマレーシア史上最初のマレー人と華人のエスニック・グループの衝突となった。この結果はラーマン首相の辞任、その後は副首相であったラザクが首相となり、ブミプトラ政策が推し進められるようになった。1971年には憲法も改正され、マレー人の優遇、特権などを付与することが決められた。これによりマレーシアではインドやインドネシアのようにナショナリズム高めることはできず、むしろマレー人、華人、インド人がその地位を守り、地位の向上に努めてきた。社会構造としてはイスラームの下にマレー人を優遇するブミプトラ政策より国内の安定と経済発展を遂げてきたことを論じた。

「第6章 マレーシアの国家統合に向けた言語政策の展開と課題」ではマレーシアの言語政策を第1期のマラヤ連邦独立期である1960年代、5.13事件以後の1970年代～1980年代、1990年代の3期に分けて論じた。ブミプトラ政策よりマレー人が優遇され、マレーシア語が公用語化されたが、1996年の教育令によりマレーシア語のみ重視の言語政策から、

英語と合わせた2言語への政策転換を図った。これにより華人やインド人はマレーシア語、英語、母語の3言語を学ぶ教育体系となった。また、マレー人も中国の経済発展に伴い、中国語が選択科目として導入され、言語教育の見直しの動きが出てきた。

国際化の社会では英語の影響力も大きい上に、マレーシア国内における中国の経済的影響も大きいことからマレーシアの言語政策は、公用語のマレーシア語による単一言語を目指す政策は不安定なものになっていることを論じた。

「第7章 マレーシアの国家発展においてマス・メディアに期待される役割」では、「(1)新聞」「(2)ラジオ放送」「(3)テレビ放送」を中心に取り上げ、「図1 マレーシアの大手メディア企業とクロス・メディア状況」によりメディア支配の様子が一見できる。D. マクウェールのメディア理論の主要な6つの原理をマレーシアについてあてはめ検証した。マレーシアのマス・メディアは「①厳しい法規制、②メディア企業の巨大化、独占化、③政府与党との癒着、④エリート層の華人を取り込んだ商業システム化」が特徴となっていること、華人側から見れば、法や規制などは受けていないが、華語の地位は低くことに変わりないことを論じた。

「第8章 マレーシアの国家建設における華人の役割と貢献」では15世紀から1940年までの華人の政治参加などの史的考察を行った。1942年2月のマレーシア華人協会(MCA)の創設により、政治参加が行われた。言語政策などにより教育面においては一時期危機的な状況等に置かれたものの、①経済的貢献、②教育的・文化的貢献、③政治的貢献を見出すことができると論じた。

「終章 結語」では同族意識、中国的価値観を持つ華人がマレーシアの国民統合では如何にしてマレーシアの一員になったかを各章を踏まえてまとめた。マレーシアの国民形成では現実的にはイスラーム化政策が大きなヒントになるとした。華人はマレーシア政府の目指す国民統合の在り方には受け入れ難いところがあるものの、民族・言語としてはマイノリティであるものの、経済的にはマジョリティである。本研究のオリジナリティはコミュニケーション政策の観点から華人問題を含めたマレーシアの統合を考察した点にあり、政治的なマジョリティであるマレー人による歩みよりが必要であり、平等化に向けてソフトランディングが現実的であると結論付けた。

論文審査の結果の要旨

本論文では多民族、多言語、多宗教国家であるマレーシアの国民統合は民族的、宗教的、言語的な差異、軋轢を残した形で経済的な発展を遂げているものの、国民統合はいまだに道半ばであること、政治的なマジョリティのマレー人によるコミュニケーション政策は、エスニック・マイノリティとの溝を深めていることを前提とし、現実を捉えている。政治的

にはマイノリティでありながら、経済的には大きな影響を持っている華人にとっては、このコミュニケーション政策は受け入れ難いものであるが、政治的な問題にまで大きく発展させることなく、マレーシア国内での華人の立場を確立していることを捉えた。

日本におけるマレーシアに対する学術研究における国民統合についての取り扱いについては1980年～90年代をピークに減少しているものの、マレーシアの国民統合に関する資料が2000年代頃まではむしろ増えているが、これはマレーシアという国の成長の時期に書かれたものであることを序章で述べている。また本論文の最大のオリジナリティは国民統合に関してマレー人や華人ではない第三者の視点で捉えたことである。さらに、政治的には決して優遇されていないが、経済的影響力を有しているマレーシア華人に焦点を当てたこともオリジナリティのひとつであり、日中コミュニケーション専攻のディプロマポリシーに沿うものである。

次に概念の整理として、統合 (integration) と統一 (unification) についても整理し、序章において「統合」について「異質性を前提にして、多元的に、一体化すること」(二頁)と明確にした。

マレーシアの国民統合に関して、華人がどのような役割を果たしているのか、またそのためのコミュニケーション政策はどのようになっているのかが最も注目されるべき点である。マレーシアは多民族、多宗教、多言語を抱えた国家であるが、本論文が華人についての焦点を当てているため、イスラーム等、宗教的な側面についての取り扱いは深掘りしないことがあらかじめ提示されている。その理由としてマレーシアではイスラームを国教としているが、マレーシア憲法第11条で信仰の自由を保障し、華人、インド人に改宗を強制していないこと、これにより宗教的な分断を避け、政治的、経済的に相互に補完してきたエスニック・グループと取り込むようになっており、宗教的な取り扱いについては慎重な態度を取った。

マレーシアがマレーシア語を唯一の公用語としてナショナリズムを推進するコミュニケーション政策をとったものの、国際社会として英語が重視され、さらにマレーシア国内における経済的な華人の優位性のために、マレー人が華語、さらにはインド人の台頭によりタミル語を習得するようになるなど、マレーシア政府の意図しない多元化が進んだ。本論文のタイトルで使用されたのが「統一」ではなく、「統合」であることはエスニック・グループとしての華人だけでなく、マレーシアの多元化を象徴的に捉えた結果である。

本論文は序章において先行研究との関連、研究倫理上の順守等明らかにされ、本論において各論をまとめ、終章においては本論で論じきれなかったイスラームの問題、現在のマレーシアの世代間の違い、貧富や教育の格差を今後の課題としている点も研究の継続性の観点から評価できる点である。COVID-19の終息後には、現地におけるフィールドワークなどで得た知見についてもさらに深め、研究の一助とすることを期待したいところである。

以上の結果、本審査委員会は、田崎亜希子に博士（国際コミュニケーション）の学位を与える資格が充分あると認める。